

# 近代英語協会第 36 回大会

—— シンポジウム・研究発表・講演 ——

開催日：2019年6月29日（土）

会場：明治大学中野キャンパス 311 教室

東京都中野区中野 4 丁目 21-1

Tel.03-5343-8360（柴崎研究室）

近代英語協会事務局分室

〒722-8506 広島県尾道市久山田町 1600-2

尾道市立大学芸術文化学部 平山研究室内

メールアドレス：hirayama@onomichi-u.ac.jp

協会ホームページ <http://www.modernenglish.jp/index.html>

(Tel.0848-22-8311（代表） 会費振込口座 00810-9-5821)

## ■ シンポジウム 10:00—12:00

---

### 『近代・英語・ポライトネス — 近代社会で(イン)ポライトに生きること —』

司会・講師： 椎名美智 (法政大学教授)  
講師： 阿部公彦 (東京大学教授)  
ディスカッサント： 滝浦真人 (放送大学教授)

#### シンポジウム趣意書

法政大学教授 椎名美智

今回のシンポジウムは、本学会でポライトネスが扱われる初めての企画で、「近代」「英語」「ポライトネス」というキーワードの下に3人の講師が語る。

近代英語期は英国社会が激変する時代であった。素性のわからない人と遭遇し会話を交わさなければならない都市化という社会現象は、言語にも影響を及ぼす。二人称代名詞の‘you’への収斂や新興中流階級の上流階級を真似たポライトな言葉遣いは、そうした社会変化がもたらした社会語用論的現象であり、ポライトネス現象である。なぜなら、ポライトネスは相手との距離感の問題であり、都市化によって人間関係は遠隔化したと考えられるからである。こうした時代のテキストには、ほかにどのようなポライトネス現象が見られるのだろうか。登場人物たちの出会い、語り手と読者との出会いの場面に注目し、形式から機能、機能から形式、様々な方向から見ていきたい。

講師陣は、『歴史語用論入門』の椎名美智、『善意と悪意の英文学史』の阿部公彦、『ポライトネス入門』の滝浦真人である。椎名と阿部は「近代」をキーワードにイギリス文学のみならず日本文学にも言及する。滝浦は2人のトークに化学変化を起こす触媒の役割を負う。

## 「インポライトネス イン ポライトネス」

法政大学教授 椎名美智

本発表では、近代における英語と日本語のテキストを、歴史語用論的に分析する。英語の分析では、「‘you-thou’問題」と「ポライトに話すこと」をテーマに、初期近代英語期の口語表現を集めた『社会語用論コーパス』を分析する。まず、コーパス全体から、1700年を境に使われなくなったとされる‘thou’の残滓を見つけ、共起する「呼びかけ語」をヒントに語用論的意味・機能をさぐり、遠距離化効果をもつ‘you’へと収斂していった二人称代名詞の「その後」について考える。また、上流階級を模倣する中流階級の夫婦を揶揄したブロム・リチャードの戯曲と、ルイス・キャロルの作品を取り上げて、その時代に「ポライトに生きること」とは、どういうことだったのかを見る。最後に、夏目漱石の『明暗』における家族の会話を取り上げ、ポライトな人たちがお金をめぐって繰り広げる静かで壮絶なバトルを語用論的視点から分析する。英日語2つのテキストから、ポライトなはずの人たちのインポライトな姿を炙り出す。

## 「文学とポライトネス」

東京大学教授 阿部公彦

近代社会の形成に大きな影響を与えたのは移動手段の発達である。輸送機関の大型化・高速化で離れた土地や異なる文化の人間が遭遇する機会が増大し、「見知らぬ他者との付き合い方」が人々の大きな関心事となった。

近代小説の隆盛を助けたのもこうした時代の趨勢である。近代小説は人々の要請に応え、「遭遇」を描くジャンルとして洗練された。プロットレベルでは、恋愛や結婚につながる「出会いのドラマ」が定番となる。もちろん興味深いキャラクターの登場も、鮮烈な「遭遇」な場面を生み出し、展開を盛り上げた。しかし、今一つ、大事なことがある。小説は、何より読者が語り手と出会う場なのである。そこでは読者は語りという「他者の言語モード」と遭遇する。そのため、両者の距離の調整が必須となり、文章にもさまざまな形で戦略的に「親しさ」（ネガティブなものも含め）の表現が組み込まれてきた。本発表では、シェイクスピア『ソネット集』、川端康成『雪国』、夏目漱石『明暗』、ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』などにおける「親しさ」の表現や距離の調整について考察し、文学とポライトネスの関係をさぐる。

## 「遠近と東西の交差点」

放送大学教授 滝浦真人

敬語型言語の日本語から眺めると、(イン) ポライトネス現象は対人距離(感)の遠近の問題であることがよく見える(穂積陳重が「近きは賤しく、遠きは貴し」と喝破したのはなんと 1919 年!)。非敬語型言語の英語ではあまり目立たないが、二人称単数代名詞に親称/敬称の区別をもつヨーロッパの TV 言語の中で唯一、“本来”の代名詞(thou)を捨てて転用形(you)に乗り換えた英語は、近代とともに遠隔化ストラテジーへと舵を切った大胆な言語とも言えよう。そして日本語も、遅れてきた近代化の中で、「親しき仲にも礼儀あり」と追随して(?)対人距離を大きくした。2人のシンポジストの話は、“そこまで”と“そこから”の像をそれぞれの仕方で描き出すだろう。椎名講師は、“遠い言葉”のコミュニケーションを、日英語で対比的に(ときに類比的に)見せてくれそうに思われる。阿部講師は、“近い言葉”を片目で見ながら、彼我における(イン)ポライトなコミュニケーションを見せてくれるだろうか。言語学的ポライトネス論も、近代とポスト・モダンのアプローチで、見るものがずいぶん違ってくる。それらがどう交差するか、わくわくしながら考えてみたい。

## 1. 「*Persuasion*におけるヒロイン Anne の発話描写」

弓削商船高等専門学校講師 石田 紗瑛

*Persuasion* (1818) は、Jane Austen が完成させた最後の長編作品である。ヒロイン Anne Elliot の発話に注目すると、作品の序盤では Anne の発話は語り手によって描写されることが多いが、後半になると、特にかつての婚約者 Frederick Wentworth との対話の中で、Anne の発話が直接話法で語られることが多くなる。Bray (2018) は Austen の作品における話法について、多様な話法の形式を意図的に使い分けていること、そして視点の移動が人物描写に効果的に作用していることを指摘している。本発表では Bray の指摘を参考に、まず Anne の発話の描写とその人物描写への効果を考察する。さらに、Anne と Wentworth 大佐の関係が変化するにつれて、二人の発話を描写する話法の形式がどのように変化するかについて分析する。

## 2. 「*Vanity Fair*における Comment Clause について」

青山学院大学准教授 山本 史歩子

William M. Thackeray を Victoria 朝時代を代表する作家に押し上げた *Vanity Fair* は、19 世紀初頭を舞台に、上流中産階級に属する人たちの滑稽・悲哀を皮肉たっぷりに描いた作品である。この作品の興味深い点の 1 つは、読者を Thackeray が意図している方向へ誘導しているところにある。そのための有効なデバイスの 1 つとして、comment clause を巧みに使用しながら、作品と読者ではなく、Thackeray と読者との調和や共感を自然に引き出している。最終的に読者は Thackeray の読みを読んでいるのである。本発表では、*Vanity Fair* における comment clause が Thackeray と読者をつなぐ重要な役割を果たしていることを示したい。更に、社会言語学的観点から、各登場人物の comment clause の選択についても触れたい。

司会 静岡大学教授 大村 光弘

## 1. 「進行形の発達とBE 動詞の特異性」

日本大学大学院生 田中 智己

BE+DOING の進行形は、近代英語後期に急速に発達する。Kranich (2010) や Los (2014) では、本構文は 17 世紀までは状態動詞と共起する頻度が高かったが、19 世紀以降動作動詞との共起が増加する事実を示している。しかしながら、両者ともその要因については言及していない。本発表では、史的言語コーパスである *Early English Books Online* 及び *A Representative Corpus of Historical English Registers* から得られた言語事実に基づき、BE 動詞の文法化という観点から進行形の統語的特性に関する通時的な考察を行ない、補部を選択される動詞の特徴が変化した要因を明らかにする。また、現在分詞を補部を取る他の動詞 (come, go, stand) と BE 動詞を比較し、BE 動詞の項構造と意味役割に着目しながら、BE 動詞だけが進行相を表わすための文法標識として発達した経緯を探る。

司会 日本大学教授 保坂 道雄

## 2. 「二次的文法化 — その本質に迫る —」

法政大学教授 大沢 ふよう

二次的文法化は、Kuryłowicz (1975 [1965])、Givón (1991)、Hopper and Traugott (2003)、Bresnan (2014) らによって論じられているが意味論的なものが多く、通常的文法化の更なる段階という曖昧な定義に終始している。

本発表では、文法化とは「場の創出」であり、当該の文法化を駆動する過程が先行し（一次的文法化）、結果として創出された「統語的場」の力によって他動的に文法化する場合を二次的文法化と呼び、新しい定義を試みる。

二次的文法化は従って時間的に遅く起こる。定冠詞 *the* は古英語では現代英語のような統語的に義務的な機能範疇ではなく、中英語末期に指示詞から文法化して冠詞となった (Osawa 2007, 2009)。この一次的文法化によって形成された統語的場において数詞 *an* は二次的に文法化され不定冠詞になった。*a/an* の出現の遅い理由はこれで説明される。また文法化が古英語末から、時に近代英語まで長期に渡ることも説明される。この二次的文法化は助動詞の文法化分析にも適用可能であると提案する。

## ■ 講演 16:50—17:50

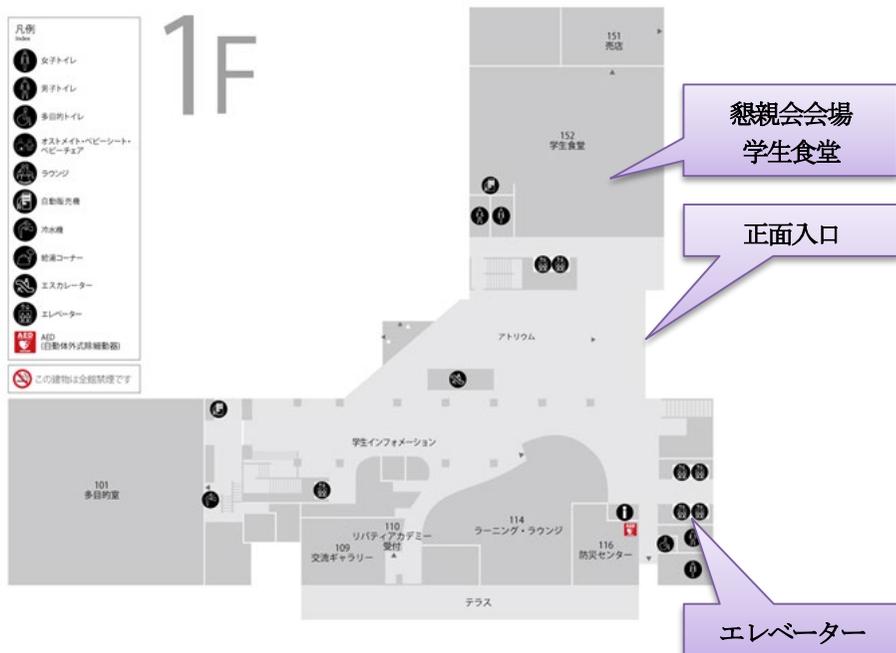
司会 愛知学院大学准教授 澤田 真由美

### 『英語における dvandva 複合語 — 古英語から初期近代英語へ —』

京都府立大学名誉教授 米倉 綽

英語の複合語は rainbow のように右側に主要部のある場合が一般的であるが、pickpocket や bitter-sweet のように主要部のない例がある。これらの複合語のなかでも bitter-sweet は意味的には ‘bitter and sweet’ に等しく、dvandva と呼ばれている等位複合語であるが、現代英語ではほとんどみられない。Bauer (2008)、Arcodia et al. (2010)、Shimada (2013) によれば、拘束形中心ではない英語などのヨーロッパの言語では dvandva は生起しないとされている。しかし、歴史的にみれば初期の英語も拘束形中心の言語であったという事実に基づけば dvandva が用いられていたと考えられる。そこで本発表では古英語から初期近代英語にかけてこの dvandva が生起しているのか、生起しているとすればどのような型の dvandva が多いのか、歴史的推移のなかで dvandva にとって代わる構造が生起しているかをみることにする。

## フロアマップ (1F)



## フロアマップ (3F)



## 明治大学 中野キャンパスへのアクセス



■ JR 中央線快速・総武線／中野駅（駅番号：JC06・JB07）下車 北口より徒歩約8分

■ 東京メトロ東西線／中野駅（駅番号：T01）下車 北口より徒歩約8分